

令和6年度 麴町幼稚園
第2回 幼稚園運営連絡会

- 日時 令和7年2月27日(金) 16:00～17:00
○場所 麴町区民館 洋室C
○参加者

【委員】

鈴木 徹 (麴町二丁目町会長)
谷 真理子 (ワーク・わくクラブ代表)
石井 雅幸 (大妻女子大学 教授)
酒井 浩子 (主任児童委員)
黛 薫 (令和6年度麴町幼稚園 PTA 会長)
田村 砂弥香 (麴町小学校長)
木村 恭子 (麴町幼稚園長)

【事務局】

荒木 久子 (幼稚園主任) 高久 由起恵 (教諭)
中嶋 優里菜 (教諭) 北村 優佳 (教諭)

- 内容

1. 開会あいさつ

2. 園長挨拶

3. 幼稚園評価について (主任)

- ・どの項目も9割以上の方が、「とてもそう思う」「そう思う」「だいたいあてはまる」という結果となり、教育活動や取り組みにおおむね満足頂いていることがわかる。園からの教育活動の意義や発信が伝わりご理解いただいているという、うれしくありがたい結果である。しかし、お一人の意見でも真摯に受け止め対応していく姿勢は、教職員全体で常に持ち続けていく。
- ・「13.親子で園生活に期待をもったり楽しんだりしていますか」という項目では、全ての方から肯定的な回答を得ることができた。引き続き、“来たい幼稚園”“来てよかった幼稚園”をつくっていく。
- ・アンケート回答数が72名中55名で回答率が76パーセント。過去最低の回答率である。保護者からの評価には、責任をもって受け止め、対応するためにも、来年度は記名式のアンケートにするなど回答率の上昇を目指すことを検討している。
- ・判断ができない、わからないという回答も1～2名であるが、複数の項目であった。判断が難しいと感じる背景を読み取れるように、理由を記載する形にしたいと考えている。

○令和7年度の教育活動について (園長)

- ・来年度の4月からは在園児59名でスタートする見込みである。保護者が預けやすい体制づくりのため、大きく2点の事業を始める。
一点目は、弁当給食の実施。いずれは自園給食を目指すことを前提に、それまでの移行期間として行う。

実施方法については早急に定めて保護者にも共有する。

二点目は、預かり保育の拡充を行う。通常の保育日に加え、閉庁日をのぞく長期休業日も7:30から18:30までの預かり保育を実施する。また閉庁日であってもやむを得ず保育を要する場合は実施する。

しかし、幼児期は親子の愛着形成を育むうえで非常に大切な時期である。預かり保育は実施するが、家庭教育を通して保護者と子どもがじっくり関われる時間にも意識を高めて頂けるよう工夫していく。

4. 事務局より

○特色ある教育活動（3歳児担任）

- ・地域の方々や専門家等を指導者としてお迎えするなどにより、子どもたちの体験する活動内容の充実を図っている。今年度も年間を通して様々な活動を実施することができた。
- ・「昔遊びに親しむ」では、運営連絡委員の方も3名講師としてご来園いただいた。3歳児もしばらくすると緊張がほぐれてきて、色々な遊びや地域の方々との関わりを楽しむ姿が見られた。登園時に保護者と離れられずに泣いていたときから比べると、幼稚園への安心感が高まり、様々な人との関わりを楽しめるようになったという育ちが感じられる嬉しい姿である。

○3歳児の生活について

- ・少しずつ次は年中児になるという見通しと意識をもててきている様子がある。
- ・登園すると互いに誘い合ったり、友達が泣いているのを見て心配して駆け寄ってきいたりするなど、人との関わりの中で大きな成長を感じている。
- ・引き続き、自分の思いを表そうとする姿や友達と関わろうとする姿を支え、思いを伝え合ったり、友達とのやり取りを楽しんだりすることができるように援助していきたい。

○園内研究について（4歳児担任）

- ・今年度は、「一人一人のよさやその子らしさが生きる保育の展開を目指して」副題「保育の質向上プロジェクト」と設定して1年間研究を進めてきた。
- ・「保護者との連携プロジェクト」では、園内研究の内容や成果を共有することに加え、懇談会などの場を活用し、教育の柱となる部分をなるべくわかりやすくして発信するなど、幼稚園教育への理解や信頼を高めることができるよう工夫した。
- ・「よさやその子らしさ発見シートプロジェクト」では、前年度に作成したシートの継続的な活用とともに、ビデオカンファレンスも行い、幼児理解を深めてその後の実践につなげることができるようにした。
- ・「こうじまちーずタイムプロジェクト」では、教職員がそれぞれ得意分野やしさを生かし、クラスや学年の枠を超えて行う交換保育を実施した。教師も他の職員を見て学び、引き出し増やしつつ、豊かな経験が充実するようにその都度内容を考えながら取り入れてきた。
- ・これら3つのプロジェクトは、内容は見直しつつ来年度も継続する。次年度の園内研究のテーマは変化していくが、保育の質向上は今後も目指していこう、と意見をまとめたところである。

○4歳児の生活について

- ・興味関心を広げて、友達と関わりながら遊びを楽しむようになった。関わりが広がった分、ぶつかって葛藤することも増えているが、そこで相手の思いを感じたり、つながりを喜んだりする経験もでき

る大事な時期だと感じながら過ごしている。

- ・学級はパワフルで個性豊かな雰囲気がある。イメージや発想も豊かで、学級のみんなで様々なことを楽しむことができるようになったことにも成長を感じる。3学期に入り、年長児になることに期待を高めている。力を発揮して、自信をもって進級できるよう、残りの生活も丁寧に過ごしたい。

○とうきょうすくわくプログラム（5歳児担任）

- ・子どもたちが心を動かし、探求を楽しむ環境を創造していくことを目的とした事業で、千代田区では令和6年度から取り組んでいる。今年度、本園では造形と自然の2つを主に取り入れてきた。
- ・石井先生には、北の丸公園遠足において虫や草花などの自然について教えていただくなど、大変お世話になった。子どもたちが探求の過程で感じたわからないことを手紙で質問すると、丁寧にお返事をいただいたこともあった。
- ・「とうきょうすくわくプログラム」の活動を通して、思ったことを言葉にする、もっと知りたいと思う、相手の話を聞くなど、色々な力が育った。そして虫や生き物への関心をさらに深めることができた。

○5歳児の生活について

- ・就学前、残り13日となり、子どもたちは修了に向けた活動を通して、自信をつけている。修了までに学級でやりたいことを出して、一つずつ実施している。残りの園生活を充実したものにしていきたい。
- ・小学校生活、新たな世界を楽しみにする幼児が多いが、緊張したり不安を感じたりする幼児もいる。環境の変化を感じつつ、子どもたちなりに頑張っている様子があるので、その気持ちを受け止めつつ、支えていきたい。

5. 懇談・意見交換等

【委員の方より】

- ・全国的に園児数が減少している。公立幼稚園は、広くはない園庭を最大限活かすなど、教育活動を工夫している。その点は保護者も高く評価しているようなので、今後も発信して行ってほしい。
 - ・延長保育の中でも、幼稚園だからこそこできる学びの部分も強調して発信すべき。同じ敷地内に小学校があることを打ち出すと良いのではないか。
 - ・没頭する遊びの中に学びがある。園での遊びが小学校からの学習に繋がってけると良い。
 - ・子どもたちは、遊びに目を輝かせながら真剣に取り組んでいる。遊びと学びの境目はない。
 - ・大人も子どもになって共に遊ぶことが大切。
 - ・子どもたちは学年が上がることにプレッシャーを感じないのか？
- 進学は、大きく環境が変わるので段差は感じやすい。進級は、「これができなくてはいけません」とではなく、「こんなにできるようになったんだね」と自分の成長を感じられるような声をかけるようにしている。
- 園団生活では、身近に年上の幼児がいるからこそ、学年が上がったときのイメージがもてる。プレッシャー以上に憧れの存在になれる期待や喜びの高まりがあると感じる。
- ・「昔遊びに親しむ」で子どもたちと関わることができた。このような触れ合いがあることは、楽しく有意義だった。
 - ・預かり保育が増え、先生方の負担が増えるのではないかという心配がある。しかし保護者からすれば、その方が預けやすいと思うかもしれない。時代とともに形は変化するが、先生方の負担が増えないように、千代田区とうまく調整してほしい。
- 預かり保育の職員が増員する予定である。また教育課程時間と預かり保育が分断されないよう連携をと

って進めていきたい。

- ・大人が楽しければ、子どもも楽しい。大人も子どもも楽しめる幼稚園でいてほしい。娘がそら組のとき、今度太陽組ができるという噂があった。次の学年に上がるというわくわく感、子どもたちの世界があったんだなと感じた。
- ・アンケート結果から、いろいろな考え方があるのだと感じた。一人の意見を無視するわけにはいかないので難しい。記名式にすると、本音が出にくくなるのではないか。そこがアンケートの難しさ。
- ・園児数減少は、幼稚園に限らず、子どもの全体数が減少しているための問題だと思われる。
- ・弁当給食の開始については、これまでお弁当を通じて子どもとコミュニケーションがとることができていたので少し残念である。お弁当についての会話で、見えない幼稚園での様子が見えていた。弁当給食はフードロスも起こりやすくなるのではないか。
- ・保護者として、園のアンケートに回答するからには責任をもつべきだと考えている。先生方が真摯に向き合ってくれる分、回答も真摯に取り組むべきであり、記名式にすることは適切である。
- ・少しでも体調が悪そうだとすぐに気づき対応していた。感染症の蔓延を防ぐことにつながっている。
- ・今年は一度も学級閉鎖なく元気に過ごすことができた。
- ・来年度保幼小の研究発表があるので、普段から連携して行っている取り組みを、他の学校園にも伝えていきたい。
- ・保育園や幼稚園から小学校にあがることにはすごくハードルがあるのだとこの1年で実感した。初めは「小学校は怖いところだ」と言っていた児童が、最近「小学校が楽しくなってきた」と話し嬉しい姿があった。彼らなりのハードルを乗り越えて成長してきたのだと感じる。今後、小学校に上がるギャップをできるだけ減らす取組を工夫し、スタートカリキュラムの改訂や実践を進めたい。

6. 閉会の挨拶